

卷末言

芸術文化への思い

この学部を創設するときに、工芸は制作者が単独で存在できるものではなく、制作者と使用者のよい関係がないと存在できないことを指摘し、芸術文化が社会に定着するためには、制作者すなわち「作り手」と使用者すなわち「使い手」の養成が不可欠であると呈示した。この時点での使い手は「生活者」という側面を強く意識している。生活者とは、自らの生き方について、自らが考え、自分にあった物品や振る舞いを峻別し、これらの関係性の構築により、生活に自分流の意味を形づくることで、満足度の高い生を全うすることのできる人である、と考えている。とりわけ、自分流の生活環境に芸術の香りを漂わせる人を作ること意識している。このような人を社会に増やすことで、社会全体の創造性を高めようとするものである。

作り手と使い手のよい関係は、工芸品をとりまく作法や社会的活動により、地域文化を形成していた、と考えられる。もてなす心の具体的な証としての贈答品を贈る行為が高岡の工芸を支えていたと聞いている。工芸を製造産業と見たところに現在の状況へ導く間違いがあったと考えられる。芸術文化として、卓越した技法により制作された芸術的香りのする物と人の行為と地域からなる社会を作っていたところが重要であった、といえよう。とりわけ、社会の多数を構成している使い手の養成は、工芸の伝承と革新において極めて重要な課題であると考えられる。芸術文化学部の第1の目標はここにある。出会った物を美しいと素直に受け入れて、大事に使う心が結局のところ使い手の本質であるようにも思う。美しいと感じるには、なによりも豊かな感性が重要となろう。大事に使うためには、その物について、作られた技法、使われる作法などその物の背景を知ることが助けとなるだろう。

作法とともに生活の中に特異な環境を形づくる工芸品は、使い手の心を沈静化させ次元の異なる心境をも生成する完成度をもっている。材料、制作技法、形態、作法が一体となって定式化された工芸品は、人の心を平穏にするほどの力を持っている、と考えられる。このように、物品の制作方法から使い手の心境にまで統一的に制作者の精神が物品を介在して働きかける力は、一連の関係を研ぎ澄ませることにより形成されている。ここでの研ぎ澄まされた関係性を工芸の合理性と呼びたい。この合理性は、現在の地域の課題あるいは地球環境の課題を解決する糸口となり、材料利用の理想循環系を構築するに至る可能性を呈示するものであることから、完成度が極めて高いものと思われる。このため、工芸品の制作は理念と技能が合体した境地にあり、作り手には厳しい

修練が要求されることから、伝承はもとより改革は容易ではない。工芸を起点としてその意味の伝承と革新を目指すことは極めて困難であるが、混沌としてざらざらした現代において、我々の精神を見失わないために、工芸の原点を見つめることは極めて意義深い、と思う。

我が国の近代化において、殖産興業に国を挙げて取り組んできたようだ。この取り組みの中で、工芸を工業に変換しようと試みられ、この流れが戦後も続けられた、と考えられる。小生の記憶によると、70年代前後には地方公設研究機関の一つである工芸試験場において、いわゆるデザイン開発、漆塗り製品をはじめ生活用品の見栄えに関わる塗膜の形成時間短縮に関する技術開発や、コピーングマシン（ならい盤）やコンピュータ制御の工作機を導入して工芸品の製造を機械化する研究がなされた。工芸に込められた合理性に気づかされる外発的機会はあったようだが、内発的には、外貨獲得、産業振興などの経済重点策が、外観だけを大量生産しようとしたように思う。工芸試験場は、その後工業技術センターに改組されて、しばらくは技術開発という旗印でこうした開発の勢いが続いたが、工芸の活性化には至らなかったように思う。先に述べたように、工芸は作り手と使い手のよい関係がないとその合理性が成立しないので、大量生産により圧倒的な個数が社会にあふれることで、物の社会性が変質してしまい、この関係が成立しなくなったのであろう。形態は同じものではあるが、そこに込められている意味がまるで異なるものと化してしまい、工芸の製造化は頓挫したといえよう。しかしながら、先に記述した工芸の合理性は、ざらざらした世の中で、これからの製品に求められるべき意味を示していることに変わりはない。手のかかるものづくりの重要性を見逃してはならない。

工芸を継承するということは、文化を継承することであり、工芸の合理性という、材料、制作、使用、継続、地球環境、が一体となった文化を継承することであると思われる。この全体像をなくして、物だけを取りあげて社会は成立しない。地域で未だに脈々と営まれている工芸に通じる文化を再構築して地域を活性化させることを第2の目標としている。

工芸を起点とした文化の再構築において、もう一つ重要なのが作り手の養成である。これには、経験的熟練をいかに教育研究プログラムへ構成するかが重要な鍵となる。ここで、どのような人材像を養成しようとしているのかを考えてみよう。

なにを見失ったのだろう。科学の成果を応用する工学的な考え

方に基づいた機械による製造は、利便性の高い道具を大量に生産し、生活環境を向上させたことは事実である。これらの製品によって実現した機能を享受して日々生活しているので、もはや、ここから逃れようとしても無理である。しかし、心の平穏を形成する工芸を再構築する意味は大きく、お茶やお祭りなど心の生活文化の残っている地方に工芸を担う職人が存在しており、再構築はまだ間に合うと思われる。高岡にも工芸を担う職人が多くおられる。ものづくりに熱中する才能はこの再構築に不可欠であり、工芸の合理性の境地に到達するための修練に耐えうる才能に通じるといえよう。

先に述べた才能は、レヴィ＝ストロースのいう「器用仕事」に通じると思う。少年のころに、時計を分解して組み立て直すのに熱中した記憶のある方は多いと思う。分解するときや再構成するとき、解を得ようと手を一心に動かして考えている様子が思い起こされる。時計をはじめ、ラジオ、自転車、蓄音機、風呂のブザーなど身の回りのあらゆる器物に熱中したのである。ビートルもよく壊れた。いわゆる機械いじりのおもしろさであろう。この熱中する行為が、工芸の伝承を担うものと考えられる。ものづくりの原点はここにあると思われる。

この才能を伸ばし心豊かな社会の形成に活かす機能が高等教育機関にあるだろうか。技術を修得する職業訓練機関では、形態を作ることに力を注いでいるように思う。前述したように、形態は同じであるが、社会性すなわち意味を具体的な形にすることを言及しているだろうか。他方、大学では本さえあれば何でもできるという知的熟練が偏重され、手を動かして熱中する経験的熟練と一線を画しているように思う。背中を見て習え、というのは深い意味があるとはいえ、先達と同じ修得にかかる期間が想定され、これでは教育機関の役割を全うしていないと思う。経験的熟練教育を大学で進める意味を考えていかなくてはならない。

大学では学問がなされている、といわれている。これまで述べてきた工芸の合理性を解きこれを普遍化した価値観に昇華させると学問へ進むような感じはするが、これでは工芸とはなんぞや、デザインとはなんぞやに繋がりが、使い手の養成に続くようではある。しかし、作り手の要請には技能が不可欠であって、これは作り手の体内に形成されるので、妙な言い方ではあるが、主観的なこととなる。学問はすべての人に共有できる知であると思われるので、主観的に留まっていたり成立しない、と考えられる。技能と論を統合した普遍的な知とするには、どうすればよいのだろう。論は記述できるが技能は叙述するのがやっとなであろう。可能な限り制作過程

を分化し、技法を叙述することで、技能を提示できるとしても、提示された文をひもといて次の世代が具体的な物を呈示できるのだろうか。その物には、使い心地の良さは込められているのだろうか、社会性までの広がりはないだろう。原点である物に語らせる以外ないのだろうか。物を見てその語るところを理解するとき、たくさんの解釈が噴出して混乱するようにも思う。解釈する要素を抽出して定義する必要が出てくるだろう。少々混沌としてきたが、これらのモヤモヤを解くのに苦慮しているのは、一分野の直球でこなそうと早急な考えを持つからであろう。手を動かしている根元に、束になって迫るのがいいように思う。この束となるべき芸術文化学のパラダイムを創りあげて、教育研究機能を組織的に進めることが第3の目標であるが、未だ達成されていない。達成しない目標があることが、未来への原動力となるものと捉えている。これらからの我々の楽しみでもあり、いつかは達成することと期待して頂ければ幸甚である。

ここでは、ものづくりの原点ということで工芸を取り上げて思いの丈を進めたが、多くの知を結集して計画される建築や卓越した感性と制作力で作られる造形表現においても、使用者あるいは鑑賞者に特別な境地を感じさせる環境を提供し、社会に影響することにおいて工芸の合理性に通じるものと考えている。したがって、芸術文化学部での教育研究分野は、美術、工芸、デザイン、建築、これらの知を支える芸術文化論に至っている。現在構想中の大学院においては、芸術と学問をさらに深め、クリエイティブな社会を担っていく人材を養成しようと考えている。

本稿を依頼されたとき、あらためて芸術文化とは何かについて考えてみよう、すなわち、芸術文化学部の創設の意味について思い起こしてみよう、と思いついた。ここに記述することは私的な思いであり、国立高岡短期大学から富山大学芸術文化学部へ改編される20数年の間に、身近に見たものづくりの現場や、諸先生の作品を鑑賞させて頂く機会により経験して得た感想である。それ故、独断で冗長な思いであることをお許し願いたい。

富山大学芸術文化学部 学部長 秦 正徳